

# 吉川史料館たより

第62号  
2017年  
(平成29年)  
3月16日  
木曜日

## 展示品の紹介

このたびは、吉川元春が息子元長に宛てた書状を紹介します。



吉川元春書状 元長宛 十二月二十四日付 (吉川家文書642号)

### (現代語訳)

先年、大内輝弘が防州乱入節に鎮圧する為に長府(下関)から山口へ向かいました。

その時に元就様から譲られた幡竿(竹は、厳島産)を使用しました。元就様がこの幡竿を持ち、度々戦勝したものを給わり、以来、私の戦いの結果は貴方が知つての通りです。

そして、小幡上りを添えます。小幡は、高野山にさし上げ、阿光坊快音遊ばされた御守りです。縁起のよいもので勝軍となります。恐々謹言

十二月二十四日 元春(花押)

治部少輔(元長殿)

### (解説)

「先年、輝弘防州乱入」とは、永禄十二年(二五六九)十月、大内輝弘が防州(山口県)へ侵攻したことをさします。かつて、大内氏は長門、周防、筑前、石見などの守護に任ぜられて繁栄していました。弘治三年(一五五七)、毛利元就の防長(山口県)攻略の際、当主義長が自刃したことにより滅亡しま

発行所 吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七―三

郵便番号 七四一―〇〇八一

電話番号 (〇八二七)―四一―一〇一〇

した。

しかし、大内再興を願う人々はすくなくならずおり、ついに大内輝弘(大内氏)の一族で豊前大分の大友宗麟の娘婿が、大内再興の為に挙兵となったのでした。

これに対して、長府にいた毛利元就は、九州の立花城攻撃中の元春と隆景を撤退させ、輝弘討伐を命じました。

元春は立花城の攻防戦から輝弘の鎮圧に向かいました。輝弘自身は富海まで逃亡し切腹し、反毛利勢力は鎮圧されたのです。この期間はわずか十日ほどでした。

また、毛利領内では、輝弘の挙兵と同時に雲(島根県)にて尼子の遺児・勝久(東福寺の禅僧から還俗)が立原久綱や山中鹿介らと挙兵したのです。そして、かつて尼子氏の本拠城であった富田城を攻撃したのです。その城には毛利氏の家臣・天野隆重が城督となり防戦し、しばらくすると勝久らは逃亡します。

この永禄十二年という年は、九州、山口、出雲と三か所で大規模な戦いがあり、毛利家としては一大事であったと思われま。元就は七十三才と高齢であり病氣もしていましたので、主家再興を願う人々は毛利討伐の好機とみて

いたのかもしれませんが。

しかし、すべて毛利側が鎮圧することができました。

元春は輝弘の挙兵の際、元就から所持していた幡竿を譲られていました。

その後、挙兵を鎮圧することが出来たので、元春はこの幡竿を縁起のよいものと信じていました。

父が戦いに持参して、勝利に導いた幡竿ゆえに尚更ではなかったのでしょうか。

それから十年以上経ち、元春は息子・元長にこの幡竿を譲ります。おそらく、隠居に際してのことです。

譲り状には、先祖伝来の書状類、幡竿、軍事において万全の体制でぬかりがないようにする事が記されています。しかし、その大事な幡竿もいつの間にか所在不明となりました。残念なことです。

### 参考資料

『山口県史 通史編 中世』

平成二十四年十月三十一日

山口県発行

(原田史子)

# 吉川本『太平記』

## 四十卷

「太平記」40巻は、後醍醐天皇即位から細川頼之が足利3代将軍義満補佐の任にあたるまでの動乱の50年間を描いた軍記物である。

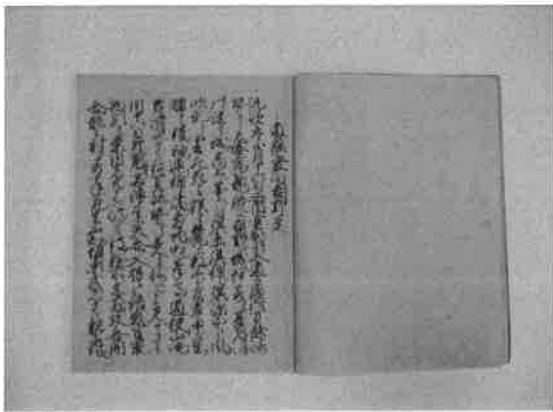
『改訂増補 日本史辞典』(創元新社 昭和39年11月改訂増補第5版)から、「太平記」の項を引用してみよう。

南北朝時代の戦記物語、40巻(巻23欠)作者は「宮方深重の者」(難太平記)といわれ、「洞院公定記」によれば小島法師をその作者というが、小島法師の伝記は未詳で、たとえば彼が作者であつても、現存太平記全部の作者でなく、数人が書継・修正をし、1370(71(応安3)4)頃に成立したと推測される。

太平記は、後醍醐天皇の即位から細川頼之の執事上洛に至る(1318(67) ほぼ50年間の目まぐるしい南北朝動乱の姿態を、変化に富む筆致をもって描き、平家物語と並んで戦記物語りの双璧とされる。日本の封建社会の進展に画期的意義をもつ時期は、保元以後源頼朝開幕までと、古代的な社会の残滓を更に払拭した南北朝動乱期であるが、これを一は平家物語が、一は太平記が生彩な描写をもって代表的

叙事文学を形成し、しかもこれらが長く庶民に語物として普及した事は大きな意義がある。太平記は儀醍醐天皇崩御までの前半と足利政権確立する後半とは、その筆致と作者の観点も異なっている。

江戸時代に喧伝されたのは前半の中興成立と瓦壊、南朝諸士の活躍する部面や合戦・兵法にあつた。しかし太平記には一貫して批判的精神が流れている。文章は平家物語をうけつつその個性描写や流麗さには及ばないが、諸国の名主・武士等の活躍と動態、社会相がよく表現されている点に時代の進展を見る。太平記はかかる点に史料としての価値をもつ。



太平記 第7(見開き部分)

既存する古写本では神田本・西源院本が最も古く、水戸大日本史編纂の為の参考太平記は流布本を底本とし諸本を参照せる物で便宜がよい。(下略)

さて、吉川家本「太平記」であるが、これは吉川元春が出雲国洗骸あらわい(今の松江市の西方)の陣中において、写し取ったものである。

永禄5年(1562)7月3日、毛利元就は、毛利隆元、吉川元春、小早川隆景を初め芸・備の將兵を率いて、尼子勢を攻めるために石見に出向けて出陣した。そうして洗骸に本陣を構築し、尼子の本城である富田月山城を包囲する態勢を整えた。

元春は洗骸滞陣中に、時間を見つけて『太平記』40巻を自筆で写したのである。この『太平記』を開くと、各巻の奥付に写し終った年月が朱書されている。永禄6年閏12月に第1巻を写し、さらに同8年4月富田城の総攻撃終了後洗骸に帰陣してから同年8月に至る4ヶ月間に残余の11巻を謄写していることがわかる。

まさに戦いに明け暮れる中、疲労も深かったと想像されるのにその筆力は雄健で文字はきわめて流麗である。驚嘆すべき精神力であつたことがわかる。この太平記には『太平記目録』1冊が付いている。紙数25枚である。その筆跡は毛利元就のものであると言われている。

毛利元就は、この太平記を読んでいたのである。さらに毛利元就の配下の

武将も「太平記」を所持したり読んでいたことが知られている。

太平記は、戦国大名や多くの武将たちが読んでいた。だがなぜ多くの武将が、「太平記」を読んだか。それは応仁の乱以来、下剋上の動乱期に突入して勃興する武将たちが新しい倫理思想、政治的権力闘争での権謀術策、あるいは兵法について、この太平記の中にその答えを見つけようとしていたのではないだろうか。

ところで戦国時代から江戸時代にかけて「太平記読み」といって太平記を語ることを職業とする人たちがあらわれた。それはやがて講談の起源となつた。太平記に登場する楠木正成の活躍は庶民に英雄として迎えられ、近代に入つても太平記は庶民の倫理・信仰に大きな影響を与え続けたのである。

### 参考文献

『太平記 日本の古典をよむ⑩』

長谷川 端

### 〔検討・訳〕

(小学館 2008年3月 第1版 発行)

『太平記 梅松論の研究』

小秋元 段

(汲古書院 2005年12月 発行)

史料館を訪ねて

吉川氏ゆかりの地北広島町

大成純一郎

北広島町は、広島県西北部の山間地域にある自然豊かな町で、ユネスコの無形文化遺産に登録された「壬生の花田植」や「神楽」など伝統文化の息づく町です。

吉川氏は14世紀前半に駿河国から当地へ入荘し、町内には数多くの史跡が残されています。

町では吉川元春が隠居所として建設した館跡や吉川氏城館跡全体を案内する施設「戦国の庭歴史館」(北広島町海応寺255-1)の整備などを行ってきましたが、より多くのお客様に出でただけるよう、平成27年度から2年間、観光客誘致のための事業を行ってまいりました。

これまで、史跡を訪れる観光客はシニア層が中心でしたが、昨今の戦国武将をキャラクターにしたゲームなどの影響もあり、若い女性や子ども達などにも歴史ファンが拡大しています。それら新たなファン層に対する情報発信や訪れていただいた方々への満足度を向上させるため、さまざまな企画を考えてまいりました。

それらの企画を形にする中で、吉川史料館には大変お世話になり、吉川元

春・広家父子の甲冑をイメージした複製品の製作や、同父子のオリジナルキャラクターの製作に史料館が所蔵されている貴重な所蔵品の写真などを快く提供いただきましたこと、心から感謝申し上げます。

おかげさまで、戦国の庭歴史館に甲冑やオリジナルキャラクターの等身大パネルと共に写真撮影ができる新たなコーナーを新設し、同キャラクターをモチーフとしたグッズも多数製作することができ、新聞にも取り上げられました。今では甲冑とともに笑顔で記念写真を撮る若い女性や小中学生のおられる家族連れの姿が見られるようになりました。

また、元春が安土桃山時代、すなわち北広島町に居住していたところに描かれた肖像画の複製品の製作および同肖像画を歴史館に展示することについてもお許しいただきました。ただ今製作を進めており、平成29年度にはお披露目できることと思いますが、元は万徳院の常什とのこと、里帰りを心待ちにしております。

最後になりましたが、本事業に関しまして、ご協力いただきました、岩国吉川会、吉川史料館、安芸吉川会のみならず、今後ますます当町と岩国市との親交が深まることを願っております。

平成29年3月

(北広島町役場商工観光課)

ふるさとへの便り

こころのふるさと岩国

森 朋子

高校を卒業して東京に出て四十二年たまたに帰るふるさとにいつも癒されています。

子どもの頃、周りは自然に囲まれていて、近くのきれいな小さな川でよく遊びました。また、田んぼの中で羽トンボを捕まえたりして、夢中で遊びました。田んぼから出ると蛭が足に着いていて血だらけになったことも良い思い出です。

その小さな頃夢中で遊んだ体験が、今の自分が健康や遊びの大切さを語れるものになっていっていると思っています。教師生活四十年。年々子供達が外で遊ぶなくなり、ゲームに夢中になっている現状見るに付け、決して元気な子どもが育っているとは思えません。また、習い事も忙しいので、外で遊ぶ機会も不足しています。

休み時間になっても、「えー、外で遊ぶの、面倒くさい。」と言って教室にこもろうとする子どもに、「元気に遊ぶことが、みんなの体を作るんだよ。」とさとすこともたびたびです。

教師生活も四十年を超え、三月に退職を迎えました。その間には、「つらいこともありました。」「もうやめたい。」と、岩国の友人に話した時に「もった

いないよ。もうちょっとやりんさい。」「ともちゃんには天職だよ。」と言われ、励まされてきました。遠くにあってもいつでも郷里の友人が支えになってくれました。そんな友人やいろんな人に支えられ仕事を続けることができました。また、時々帰って見る岩国の山や川にも元気をもらってきました。

もう二十年ぐらい前になりますが、父が脳こうそくで倒れ、入院生活となりました。母が病院に寝泊まりして世話をしていたので、せめて月一回でも交代したいと思い、月に一回金曜日の午後、新幹線で帰りました。当時はのぞみ号も本数が少なく病院についたら、夜九時過ぎになることもありました。

そんな時期阪神大震災がありました。その時には、広島空港まで飛行機で行き、乗り換え通いました。

疲れていても、岩国の山と川が変わらない姿で迎えてくれると、そんな生活が三年近く続きましたが、介護の甲斐もなく父は旅立ちました。しかし、今も母が岩国で暮らしています。これからも母と私に元気をくれる素敵な故郷であり続けてほしいと思います。

(東京都町田町在住)

歴史エッセイ

洞泉寺と「釈尊涅槃図」

横山にある曹洞宗 洞泉寺は吉川家の菩提寺であった。そして岩国五ヶ寺の筆頭であった。五ヶ寺とは、洞泉寺、万徳院、実相院、妙福寺、永興寺を言った。

開基は吉川駿河守経信が、永享7年(1435)領地である安芸国新庄に建立したことに始まる。

その後、駿河守経基が寺領などを寄附して、菩提寺とした。

吉川広家は、天正19年(1591)6月、芸州から雲州富田城に移ったが、芸州から洞泉寺を移すまでに至らないうちに、天下が一変し、広家は岩国に移封されるに至った。

岩国の横山に洞泉寺が建立されたのは、慶長8年(1603)であった。広家は寺領60石を寄付した。

山号は盤目山と号すが、初めは万木山と言った。これは最初芸州宮迫村盤目に建てられたからである。また寺号は初め洞仙寺と称した。いずれもいつ名称変更したのかは、不明とされている。

横山の紅葉谷に入ると、手前に吉川家墓所、続いて永興寺があり、その奥に洞泉寺がある。名刹である。

石段を上がると山門の前に梅の木が何本かある。これは臥龍梅といわれるもので、私達が子どもの頃には、梅

の木の枝が地中に潜り再び地表に出て本堂に竜がのたうっているようであった。今は大気の汚染のせいか、その部分は枯れてしまった。それでも洞泉寺の一つの名物である。

本堂にあがると、内部は平成の改修で新しくなり、本尊は釈迦牟尼佛である。

山口県指定有形文化財(彫刻)である。指定名称は金銅如来形座像(寺伝釈迦如来像)である。金銅作りで伝来は不明であるが、「大きな頭部をやや前方に傾けた形姿や台形の膝部の表現などから本像の制作は、高麗時代後期(14世紀初期)ごろと考えられる。」とされる。

本尊の背後の位牌堂には、吉川家歴代の位牌が残されている。明治4年の廃藩置県後、旧大名家は東京に移住し、華族に列せられ、神道に改宗することになり、菩提寺は解除された。

ところで、2月にお詣りすると、本堂内部右手の内壁に、「釈迦涅槃絵図」が掛けられている。たて166センチ



洞泉寺 山門



涅槃図

×よこ148センチの大きな絵である。釈迦の入滅が2月15日であるので、その日には、特別な法要が執行される。

画面中央には、菩提樹の下で北枕に横たわる釈尊の姿。左上には雲に乗って葉袋を持って駆け付けた母の姿、足の速い韋駄天は真つ先に駆け付けたと思われ最前列に描かれ、多くの菩薩が悲しんでいる。下方部には象や牛などの動物から始まって犬や猫、亀や鼠、あるいは蛇やトンボ、セキレイや雀まで、たくさんの鳥獣が集まって悲しんでいる。

釈迦の生前の教えでは、この世の生きとし生くるものはすべて救われ、極楽浄土に迎えられると説いていた。画面左下に、この絵を描いた溪鷗子(けいおうし)のサインがある。

これは内田溪鷗子のことである。森脇善兵衛の子として生まれたが、のちに内田伊兵衛の養子となった。絵画の上達に見るべきものがあり、お手廻組に付けられ、高17石、外に2人扶持を給った。藩主上洛の時は、彼の絵を常に持参したという。江戸でも珍重されたものと思われる。享保19年没。

私は「涅槃図」が好きで、美術館・博物館で展示されることを知ると出来るだけ出かける。

私は釈迦の動植物まですべて救われるという思想がとても好きである。しかし、鎌倉時代この考え方をとる本覚思想を、日本仏教は異端として排斥してしまった。

いまやキリスト教もイスラム教も仏教も、救われるのは人間だけとしてしまっている。私はこれからの人類と地球の未来を考えると、動植物との共存の思想が広がらないと、やがて地球は破滅すると思っている。

- 1 『よくわかる絵解き涅槃図』 竹林史博(平成26年9月5刷)
- 2 「寺社記」(岩国徴古館所蔵史料)
- 3 「洞泉寺の栞 55号」 田村武士 (藤重 豊)

編集後記

▽この度は「元春公」について展示しています。井伊直虎と同世代ですからドラマを見ながら、似たような境遇だなと想像しています。(原田)

吉川史料館  
〒741-1008  
山口県岩国市横山二丁目七・三

TEL 〇八二七・四一・一〇一〇  
FAX 〇八二七・四一・三二〇〇